



今どきコラムー41

中国雑談

雄安と深圳

3つの貧乏県に加え一つの縮小しつつある湖からなる雄安は、「千年の大計」という5文字のために、一躍、中国都市の王となった。各種の推測はさておいて、雄安の出現は北京や深圳、ないしは上海（浦東）すべてにとって意表を突くもので、数十年続いた中国の都市構造が再調整されることになった。

「雄安は第二の深圳となる」と言われるが、果たして不動産転がし達の夢を実現させることができるのか。それにはまず深圳の成功の要素について知る必要がある。

まずは、時代の選択である。計画経済から市場経済へのモデルチェンジにおいて、深圳はフライングスタートを切り、政策と時代という「ボーナス」を受けることができた。ちょうど中国も世界の製造業の大移転の最後のチャンスに乗り、国の扉を開放したとたん、外国資本という雄壮な部隊がどっとなだれこんで来た。

次に、香港に隣接していたことである。このことが、この都市をその他の都市とは比べ物にならない特別なものにした。

三つ目は国内の人口移動であり、移民文化である。これが、深圳に迅速に自己の都市文化と競争力を形成させた。その独特な企業家精神は、すなわち移民文化と市場意識が結合したことによる産物である。

四つ目はリーダーによるひいきである。カギとなる時期に鄧小平が二度深圳に赴いて改革開放の大義名分を明らかにし、イデオロギーにおける攻撃を抑え、深圳を大いに発展させた。

比べてみれば、雄安もまた天の時、地の利、人の和のすべてが揃ってはいるが、様相は



極めて異なる。

一、天の時。時代は変化しているが、現在の変化は、文革終結時の改革開放の時の変革とは比べ物にならない。当時は10億の中国人全体が切羽詰まって現状を変えようとしていて、その力は強大で、誰もそれを阻止することはできなかった。

二、地の利。雄安は北京に根を持ち、北京に依存しているので、北京がいかにかにひどい状態とはいえ、もはや巨大で豊穡な政治・経済の生態システムが形成されている以上、人為的に生態を変え、雄安と北京の間に相互補完関係ができるかどうかは、いまだ観察を待たねばならない。

三、人の和。深圳に特区が建設されたばかりの時には、誰も来る人がおらず、多くの人々が夜も眠れないほど創業を心待ちにしていたわけではなかった。1984年と1992年の鄧小平の二度の南巡（視察）の後、ようやく多くの移民が南下してきた。雄安における北京の行政的な動員によりこぞってやって来た「エリート移民」と、深圳の草の根移民とは、気持ちの上で異なっている。これが文化にいかなる変化をもたらすだろうか。

四、リーダーによるひいき。使われている言葉から見ると、雄安はよりリーダーによる寵愛を受けているが、1980年深圳特区が成立した時には、「百年の大計」という言葉すらなく、鄧小平も深圳を実験畑にすることに同意しただけにすぎなかった。

（『日系企業リーダー必読』編集長 陳言）